

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02524

研究課題名（和文）スウェーデン女性運動の比較発達社会史的研究

研究課題名（英文）Women's movements in Sweden: Focusing on culture of human development woven into everyday life

研究代表者

太田 美幸 (OHTA, Miyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：20452542

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀後半のスウェーデンにおいて女性運動が強い影響力をもって一連の制度改革を導きジェンダー秩序の変容が促されたとする見方をふまえ、女性運動の実態と人々の意識や行動特性の変化を解明することを目指した。19世紀末以降の産業構造の変容とそこでの女性労働者の位置づけ、「女性運動」と目されてきた諸運動の類型、各運動の成立背景と活動の特徴、組織間の関係のありようを整理したうえで、それらを1930年代から1960年代にかけての専業主婦の急増・急減の過程と照合する作業により、良妻賢母イデオロギーの質的変容とそれに伴う家事改革の様相を、ジェンダー秩序の変容を導いた要因の一つとして把握した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のジェンダー研究においてスウェーデンへの関心は高いが、女性運動の展開をふまえたジェンダー平等化の過程が通史的に把握されてきたわけではない。本研究は、スウェーデンの女性運動において積み重ねられてきた「生きられた経験」を発達文化の観点から読み解くことを通じて、19世紀後半から1970年代までのジェンダー平等化の過程を日常生活のレベルで描きながら、多様な運動を通じて育まれた協同的で自治的なネットワークが果たした役割を指摘した。加えて本研究では、日常生活を支える実践知の獲得過程（生き方をめぐる日常的実践）を捉える枠組みとしての比較発達社会史の方法論的可能性を示すことも試みた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed, from the perspective that the power of the women's movements in Sweden led to a series of institutional reforms in the 1960s to the 1970s and promoted a transformation of the gender order, to clarify how the movements that expanded in the first half of the 20th century influenced the consciousness and behavior of women living in that era. For that, the changes in the industrial structure since the end of the 19th century, the position of female workers within that, the types of different movements, the background to the establishment and the characteristics of each movement and the relationships between movements were examined, considering the process of the rapid increase and decrease in housewives from the 1930s to the 1960s. As a result, it was identified that the qualitative change in the concept of the "faithful wife/faithful mother" and the accompanying reform of housework were one of the important factors characterizing the transformation of the gender order.

研究分野：教育社会学

キーワード：スウェーデン ジェンダー 女性運動 比較発達社会史 発達文化 家事

### 1. 研究開始当初の背景

スウェーデンでジェンダー平等化が進展していることは、各種の指標により明らかにされている。その過程については、福祉国家論 (Hirdman 1989、1998、宮本 1999)、フェミニズム研究 (Svanström & Östberg 2004、中山 2012)、社会福祉学 (今井 2016) などにおいて研究され、1921 年の女性参政権の実現や、1930 年代以降の家族政策、1948 年に導入された母親への児童手当支給、1971 年の夫婦分離課税制への移行など、ジェンダー平等を導く制度改革を軸に福祉国家とジェンダー構造の関係が検討されてきた。Hirdman (1998) によれば、スウェーデンでも 1950 年代まで、女性は主婦とパートタイム労働者の二重の役割を担うという考えが支配的であったが、1960 年代に女性が男性と同様に労働市場に参画することを前提とする制度改革が実施されたことにより、ジェンダー秩序が劇的に変化したとされる。ここから、スウェーデンの女性運動がいかにして強い影響力を持ちえたのか、ジェンダー秩序の転換に向けての人々の意識の変化はいかに進行していたのかという問いが導き出される。これは、これらの運動やそれに連なる制度改革が市民社会の主体としての女性を育てることにどう寄与したのかという、人間形成論的な問いでもある。

スウェーデン国内では、19 世紀後半以降の女性運動史をめぐる研究成果は、女性史および社会民主主義運動史、労働運動史を中心に蓄積されてきた (Backlund & Hayman 2011 など)。女性の教育機会拡大の過程に注目する教育史研究も少なくなく、女性運動において自立のための教育が切実に求められたこと、その成果として高等教育への入学資格や男女平等教育が実現したことなどが具体的に明らかにされてきたほか (Frolin 2011 など)、民衆運動や民衆教育をジェンダー視角から検討する研究 (Nordberg & Rydbeck 2001) もわずかながら存在するが、運動自体が市民社会の主体としての女性を育てることにどう寄与したのかという関心にもとづく研究は、その必要性が指摘されてきたものの (Andersson 2010)、本格的に取り組みられるには至っていない。

また、日本のジェンダー研究においてもスウェーデンへの関心は高いが、女性運動の展開をふまえたジェンダー平等化過程の実態が通史的に把握されてきたわけではない。本研究では、スウェーデンにおける福祉国家形成とジェンダー平等化のプロセスを日常生活のレベルから読み解くことにより、政策過程や制度分析からは見えてこない社会変動の動態を描くことを目指した。

### 2. 研究の目的

日本とスウェーデンにおける福祉国家の展開をジェンダーの観点から比較した今井 (2016) は、少子化および労働力不足という社会現象に対して両国がとった対応の違いがジェンダー平等における著しい差異をもたらしたと指摘し、異なる対応がとられた要因の一つとして女性運動の組織率と社会的影響力の違いを挙げている。この指摘をふまえ、本研究は、スウェーデンにおいて民衆運動の一つに数えられる女性運動 (kvinnorörelsen) が、人々の意識や行動特性の変化にいかに関与し、女性の社会参加にいかに寄与してきたのかを解明することを目的とした。

女性参政権の実現 (1921 年)、母親への児童手当支給 (1948 年) 等を契機とする家庭内のパワーバランスの変化、労働市場への本格参入 (1960 年代)、夫婦分離課税制への移行 (1971 年) など、ジェンダー秩序の変化の兆しが現れた諸局面においては、女性たちの生き方の算段や自己実現の構想も大きく変わり、日常生活を支える実践知の獲得の仕方も変化を余儀なくされたはずである。本研究ではここに注目し、新たな自己実現のイメージを形成しその実現の手立てを構想した (せざるを得なかった) 女性たちにとって女性運動がいかなる意味を持っていたのかを探り、それがジェンダー秩序の転換において果たした役割を検討することとした。

### 3. 研究の方法

女性運動において展開された多様な活動に内包される教育的作用について、さらには運動から派生した社会生活の諸側面における変化が女性たちの意識にもたらした変化について読み解くために、本研究では比較発達社会史の分析枠組みを用いた。

学校制度とは異なる教育の事実としての「フォーク・ペダゴジー」を民衆の日常史から掘り起こし、近代における「人づくりの諸過程の構造転換」を明らかにするという課題を示した中内敏夫の提起を受けて、関啓子は、社会において自立して生きる力の育成をめぐる構想と手立てを「発達文化」として概念化し、日常世界に織り込まれたその文化を比較という方法で浮かび上げさせ、その変容の動態を歴史的に読み解くことを「比較発達社会史」として提起している。発達文化の変容過程は、少しでも心地よく生きるために、自分と周囲の人々との関係、自分と社会との関係の再調整・再編成を試みてきた人々の生きざまの軌跡 (ライフヒストリー) を、異文化者の眼で、その社会の事情をふまえて読み解くことによって捉えられる (関 1996)。本研究では、ジェンダー秩序の転換のなかに生きた人々の経験を、こうした視角から掘り下げることを目指した。

スウェーデン女性運動史の起点は、19 世紀後半に生じた女性参政権運動にあり、その中心となったのは 1884 年設立のフレドリカ・ブレーメル協会である。同協会の主導者ソフィ・アドレシュパッレは、同時代の作家フレドリカ・ブレーメルが小説を通じて訴えた女性解放の主張を、スウェーデン初の女性向け雑誌の発行、読書サロンや手工芸学校などの学習機会の開拓などを通じて女性たちに届けようとした。だが、1921 年の女性参政権実現の後も性別役割分業意識は根強く、1932 年に発足した社民党政権が

福祉国家建設に向けて掲げた「国民の家」構想においても、女性の任務は家庭を快適に保つことであると明言されていた。既婚女性に占める専業主婦の割合は1930年(約9割)から1950年(約6割)にかけて減少したものの、女性の役割をめぐる意識が変化したのは、女性の労働市場への参加を促した1960年代の制度改革以後であったとされる。1960年代末に第二波フェミニズムの流れのなかで生まれた社会主義フェミニズム団体が闘争的な運動を展開したこともあって短期間で世論が刷新され、1984年には当時のパルメ首相が「主婦という役割は消滅した」と述べるに至った。

上記の流れをふまえると、スウェーデンの女性運動は、19世紀後半から普通選挙権が実現する1920年代まで、「国民の家」構想のもとで制度改革が進んだ1930年代から1950年代、労働市場への参加が進み、「新しい女性運動」も登場した1960年代以降、の三つの時期に区分できる。本研究では、女性運動の主張や活動の変遷、そこに見られる地域的特性等を時期ごとに把握したうえで、特にからへの転換に注目し、性別役割分業を前提として福祉国家が形成されようとしていた時期に育った女性たちが、1960年代以降に迫られた生き方の変容にどのように向き合ったのか、そこに女性運動はどのように関わったのかを検討した。

分析の対象としたのは、女性運動団体の本部や地域支部に保管されている活動記録と、女性たちによって1960年代以降に書かれた(語られた)ライフヒストリーである。スウェーデンにおいて自分史を記録する取り組みは、日本の生活記録運動や英国発祥のヒストリー・ワークショップ等と異なり、ナショナルイズムの台頭を受けて展開した郷土保護運動(景観保存運動)における郷土史研究から派生し、学習サークルや民衆図書館で多く取り組まれた。その記録の一部は、各地域の郷土史博物館や、学習サークルを主催する民衆教育団体の支部等に保管されている。1970年代には、女性運動団体SKVが発行する機関誌において、各地域の中高年女性のライフヒストリー・インタビューが特集として継続的に掲載された。1982年には自分史の語りと出版を支援する全国団体「Liv i Sverige」が発足し、女性を書いた個人史を集めた「働く女性の自分史」シリーズを出してきたほか、セツルメント施設を拠点として「自分史を語るカフェ」を定期開催し、語りを収集してきた。また、1990年代には女性史研究者らが1930年以前生まれの女性100名のライフヒストリーを収集し、回顧録(Hirdman et.al.1995)として出版している。本研究では、これらの資料を中心として、19世紀末から20世紀前半に生まれた女性たちのライフヒストリーを世代ごとに収集し、各種の女性運動の具体的活動と照らし合わせながら読み解くことを試みた。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、2023年3月に単著『スヴェンスカ・ヘムの女性たち スウェーデン「専業主婦の時代」の始まりと終わり』(新評論)として刊行したほか、本研究を基課題として実施した国際共同研究強化(A)「スウェーデンにおける初期女性職業教育とジェンダー秩序の変容 手工芸領域を中心に」(2020~2022年度)にかかわる学会発表や雑誌論文等においても一部を発表した。上述の単著では、女性運動諸団体の発行物、労働組合における女性たちの活動記録、民間団体が約30年かけて収集した女性労働者によるライフヒストリー集などを主な資料とし、20世紀初頭より顕在化した産業構造の変容とそこでの女性労働者の位置づけ、「女性運動」と目されてきた諸運動の類型、各運動の成立背景と活動の特徴、組織間の関係のありようを整理したうえで、それらを1930年代から1950年にかけての専業主婦の急増および1960年代におけるその急減の過程と照合する作業により、良妻賢母イデオロギーの質的変容とそれに伴う家事改革の様相を、ジェンダー秩序の変容を導いた要因の一つとして把握した。その内容を簡潔に要約するならば、次のようになる。

専業主婦という生き方は、1930年代に社会民主党政権が打ち出した「国民の家」構想において強力に奨励されたものだった。失業対策の一環として女性が労働市場から撤退することが望まれるとともに、住宅政策においても少子化対策においても、女性が家庭にとどまり、家事や育児をかしこく切り回し、国民生活の近代化の担い手となることが期待されたのだが、それはさまざまな運動に関与する女性たち自身が、自らの経験に立脚しながら追求してきた生き方でもあった。そうした生き方が多くの女性に受容された背景には、階級の垣根や立場の違いを超えた交流と連帯があったのだが、それは20世紀初頭以降、女性労働運動をはじめとする女性たちの諸運動が互いに交流し、さまざまなレベルで協力関係を構築してきたなかで育まれてきたものだったといえる。

家事の合理化に取り組む女性たちの運動は政策と同調し、1940年代以降、さまざまな啓発活動が女性たちの手によって大規模に展開されるようになる。その動きは第二次世界大戦下でピークに達し、テイラー主義的な科学的管理の手法にもとづく家事研究が精力的に進められ、その成果が住宅政策や消費の啓発を通じて広く国内に普及し、多くの家庭の日常生活をつくりかえていった。そのなかで、家事や育児をめぐる性別役割の変容を目指す運動が影響力を増していき、「ジェンダー秩序の劇的な転換」を導く一連の制度改革を可能にしたのである。

他方で、専業主婦の急増・急減といった現象の背景には、1930年代の失業率の上昇とそれを受けた労働運動内でのジェンダー秩序の強化、ノンフォーマルな成人教育機関における職業教育コースの増加、そこへの女性の参加といった一連の動向があった。この点については、上述の国際共同研究強化(A)において取り組んだ日瑞比較歴史分析を通じて、職業教育がノンフォーマルな機関で提供されたことが女性の意識変容において重要な意味をもっていたことが確認された。

さらに、女性たちの諸運動においては、ジェンダー平等の実現にはリプロダクティブ・ライツとセクシュアル・ライツが不可欠であるという認識が共有されており、その獲得が一貫して目指されていたことが、本研究を通じて浮かび上がった。こうした動きを分析することは本研究の課題にとって不可欠であると考えられるが、研究期間内にその作業を終えることができなかったため、この点については、基盤研究C

24K05760「コミュニティを基盤とするセクシュアリティ教育の社会運動史的研究」(2024～2027年度)において引き続き取り組むこととしている。

- Andersson, B. (1977) *Folkbildningens samhällsroller*, Studieförbundet Vuxenskolan
- Hirdman, Y. (1989) *Att lägga livet till rätta*, Carlsson.
- Hirdman, Y. (1998) Statepolicy and gender contracts: the Swedish experience, in Drew, E., Emerek, R. & Mahon, E. eds. *Women, Work and the Family in Europe*, Routledge.
- 宮本太郎(1999)『福祉国家という戦略』法律文化社.
- 中山庸子(2012)『スウェーデンの男女平等の起点と到達点』ノルディック出版.
- 今井小の実(2016)「ケアの社会化・ジェンダー平等化と福祉国家」『季刊社会保障研究』51(3).
- Svanström, Y. & Östberg, K. red. (2004) *Än män då? Kön och feminism i Sverige under 150 år*, Atlas.
- Backlund, B. & Hayman, A.S. red. (2011) *Kvinnohistoria i Sverige*, Göteborgs universitet.
- Frolin, C. (2011) Kampen om kunskapen, i Backlund .& Hayman red. (2011).
- Nordberg, K. & Rydbeck, K. red. (2001) *Folkbildning och genus*, Mimer.
- Andersson, I. (2010) *Vi Kvinnor och Vi Män 1947-2009*, SKV.
- 関啓子(1996)「教育改革の思想史的研究の試み」『理想』(658).
- Hirdman, Y. Bohman, K. & Rørslett, M.B. red. (1995) *Påminnelser: om kvinnors liv i Sverige*, Carlsson.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>太田美幸                         | 4. 巻<br>-       |
| 2. 論文標題<br>スウェーデンの成人教育機関コムブクス          | 5. 発行年<br>2021年 |
| 3. 雑誌名<br>教育新聞                         | 6. 最初と最後の頁<br>- |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-       |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>太田美幸                         | 4. 巻<br>-       |
| 2. 論文標題<br>スウェーデンの性教育とユースクリニック         | 5. 発行年<br>2021年 |
| 3. 雑誌名<br>教育新聞                         | 6. 最初と最後の頁<br>- |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-       |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>太田美幸   | 4. 巻<br>61            |
| 2. 論文標題<br>書評 長谷川紀子著『ノルウェーのサーム学校に見る先住民族の文化伝承：ハットフェルダル・サーム学校のユニークな教育』 | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>比較教育学研究  | 6. 最初と最後の頁<br>214-216 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                               | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>太田 美幸                                 | 4. 巻<br>70巻4号         |
| 2. 論文標題<br>「国民の家」の女性と家事 スウェーデンにおける福祉国家形成と消費者啓発  | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>日本家政学会誌                               | 6. 最初と最後の頁<br>222～228 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.11428/jhej.70.222 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難          | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>太田美幸                           |
| 2. 発表標題<br>教育とSOGI                        |
| 3. 学会等名<br>LGBT法連合会シンポジウム「法整備とSOGI」（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2022年                           |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Miyuki Ohta   |
| 2. 発表標題<br>Konsordningen i hantverksrorelsen och dess omvandling: En jämförande historisk analys mellan Sverige och Japan med fokus på icke-formell utbildning |
| 3. 学会等名<br>Mimers forskarkonferens 2021（国際学会）  |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>太田美幸                      |
| 2. 発表標題<br>日瑞の近代手工芸運動と女子教育：比較歴史分析の試み |
| 3. 学会等名<br>北欧教育研究会                   |
| 4. 発表年<br>2021年                      |

〔図書〕 計5件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>太田美幸                                  | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>新評論                                   | 5. 総ページ数<br>224 |
| 3. 書名<br>スヴェンスカ・ヘムの女性たち：スウェーデン「専業主婦の時代」の始まりと終わり |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>中田麗子、佐藤裕紀、本所恵、林寛平、北欧教育研究会（市川桂、井上瑞菜、上田星、太田美幸、坂口緑、澤野由紀子、田平修、田中潤子、針谷有佳、長谷川紀子、原田亜紀子、松田弥花、松林杏 樹、見原礼子、矢田明恵、矢田匠、山辺恵里子、山本みゆ紀、渡邊あや） | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>明石書店   | 5. 総ページ数<br>272 |
| 3. 書名<br>北欧の教育再発見  |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>LGBT法連合会編、神谷悠一、三成美保、中川重徳、原ミナ汰、本田恒平、太田美幸、小山聡子、河野禎之、藤沢美由紀、奥野斐、遠藤まめた、太田啓子、北仲千里、中塚幹也、堀江有里、戸松義晴、斉藤正美、鈴木翔子、松岡宗嗣） | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>かもがわ出版   | 5. 総ページ数<br>160 |
| 3. 書名<br>SOGIをめぐる法整備はいま  |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>北欧教育研究会（中田麗子、佐藤裕紀、本所恵、林寛平、浅井幸子、太田美幸、是永かな子、澤野由紀子、鈴木寛志、長谷川紀子、原田亜紀子、伏木久始、松田弥花、松本進乃助、両角達平ほか） | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>明石書店   | 5. 総ページ数<br>248 |
| 3. 書名<br>北欧の教育最前線  |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>Hideki Maruyama, Miyuki Ohta, Chiho Ohashi, Abid Hussain, Kimiko Nii, Tulay Kaya, Reiko Mihara, Aki Yonehara | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>Routledge  | 5. 総ページ数<br>172 |
| 3. 書名<br>Cross- Bordering Dynamics in Education and Lifelong Learning A Perspective from Non- Formal Education         |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

|         |                           |                       |    |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関   |  |  |  |
|---------|-----------|--|--|--|
| スウェーデン  | リンシェーピン大学 |  |  |  |